
ゴッズ・ミステイク-神様の過ち-

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッズ・ミステイク - 神様の過ち -

【NNコード】

N9544Z

【作者名】

一期 つかせ

【あらすじ】

密室に閉じ込められた二人の中学生、カズヤとアスカ。何もない部屋、床には出刃包丁が落ちていた。アスカは、伝言をしつかりとカズヤに伝える。

表面化する陰謀と身勝手な思想。なぜ彼らは部屋へ召喚されたのか！ 激動の一週間を描いたSFサスペンス！

カオリ - 最後の会話（前書き）

お試し連載です。

カオリ - 最後の会話

「そろそろ、教えてよ。」これは何なの？ あなたは、誰なの？」

アスカは神妙な顔で、静かに言った。だが、叩きつけるように壁に突き立てた包丁が、イライラが募っていることを物語っていた。憎たらしげに、カオリを睨んでは、ぐつと歯を食い縛る。

広々とした部屋にはカオリとアスカの一人以外、誰もいない。周囲を取り囲むように、等間隔に扉が複数、存在したが、入ることはおろか、開けることすらできない。窓は無く、天井を見ても、蛍光灯の一つもない。それなのに、明るく感じた。部屋自体が、うつすらと不気味に光を放っているように思えた。

「やっぱり」カオリは口を重々しく開いた。「メガネ、棄てちゃつたんだね」

わざわざ訊くつもりはないと思っていた。何度も、言つべきか躊躇つた言葉が、一瞬の隙を見計らつて、口から溢れ落ちるように、声となつて響いた。すぐに口を閉じる。同時に、目も閉じた。カオリにとつては、アスカの口からどんな言葉が出るか、なんとなくだが、わかつっていた。床につけた膝が、今さら、冷たさを感じる。

「何の話？」

短く、すげない言葉だつたが、予想と完全に一致していた。カオリは、ゆっくり目を開ける。目尻には涙があつた。視界が霞んでいく。自分らしくない、と必死に手の甲で涙を拭う。黒字で『〇』と書かれていることに構うことなく、両目を拭つた。

立ち上がるうとしたが、思ったように力が入らない。跪いたまま、アスカの姿を見据える。茶色に染まつた長い髪、人生で、一度とて笑つたことが無いような、そんな印象を受ける血を感じない冷淡な表情。だが、小柄で華奢な身体には、愛嬌を感じた。

アスカは、カオリに背を向けると、目交にあつた扉のノブをおもむろに握つて、がちゃがちゃと慌ただしく引っ張つた。がちゃがちゃがちゃがちゃ、と開きもしない扉を何度も開けようと試みる。だが、やはり、開かない。扉を両手で思いつつき叩き、「弱そうな不良は口を開かない。扉も開かない！」と嘆いた。

「弱そうな不良」が自分のことを指しているのだと、カオリはすぐにつかつた。言い返す氣力も無い。白くて冷たい床に、倒れこんでしまいたくなつた。

「ねえ！ 教えてよ！ ここはどこなの！ それに、あんた誰！」

そう叫んだアスカの語勢は、今まで一番強かつた。

「ごめんねアスカ！」アスカの勢いを捩じ伏せるように、カオリが大声で叫んだ。アスカは退く。扉に背がつき、小さな音がなる。まばたきし、不思議そうな顔でカオリを見据える。「あたし、アスカのこと、大好きだつた！ 知つてたはずなのに！ アスカのこと！ あんなバカみたいなこと、するはずないって！」

アスカは、眉間に皺を寄せた。いつたい何を言つてるんだ、という表情でカオリを睨んだ。しかし、すぐに顔を横に向か、壁に刺さつた包丁に視線を向けた。片手で包丁を引き抜くと、それを床に放るように投げた。

包丁は床を滑り、カオリの目の前で止まる。カオリはつられるように、包丁へ視線を向けた。刃渡り三十センチメートル程度の出刃包丁だ。刃先には、血がついていた。

カオリはすぐにアスカへ視線を戻した。そのタイミングを見計らつたように、アスカは「私はちゃんと、殺した！ あんたに言われたから、そうした。そしたらあんたが、泣き出した！ どうしてなの！ 説明もしないでさ！」と叫ぶ。「この数字も、何なの…」両手の甲を見せつけるように突き出した。

アスカの両手の甲にも、黒字で数字が書かれていた。右手の甲には、『0』、左手の甲には『3』。いずれも整った明朝体だった。

その数字が、何を意味しているのかは、カオリにも判らなかつた。黙つて自らの両手の甲を見下ろす。右手は、アスカと同じく『0』、左手は『2』。ふうふと息が漏れる。腕で額を拭つた。暑くもないが、寒くもない。それに、汗をかいていたわけでもないのに、無意識に手が動いていた。気づいたのは、拭い終わつた後だつた。

「そうだ」カオリは忘れていたこと思い出したかのように、声を発した。「リュウにも、会つたんだ」

アスカは返事をしなかつた。あまりにもカオリが何を言つているのかわからず、吹つ切れてしまつて、ただただ視線だけを向けた。

「リュウが言つてたんだ。アスカに会つたら、絶対に言えつて。危なかつた、忘れるところだつたよ」カオリは頬を緩めた。「『ごめんなさい』、だつて。土下座してた。あたしからも、ごめんね」

言い終わると、沈黙が訪れた。時間的には数十秒だったが、実感的には数十分にも思えた。

「お願い。私を、元の生活に戻してよ」小さな声だった。微かに、アスカがそう言うのが聞こえた。「言ったのはあんたじやない。元の生活に戻れるって」

「元の生活に戻つて。何かいいことがあるの?」カオリは反射的に口走つっていた。慌ててすぐに両手で口を塞いだ。くいと頭を前へ傾け、申し訳なさそうに、上目でアスカの顔を見る。アスカの肩が小刻みに震えていた。唇を噛み締め、視線を一度は下へ伏せたが、すぐ上へ向けると、「確かにそうだね」と淡々とした口調で呟いた。視線の先にどんな映像が浮かんでいるのか、判然としないが、カオリは、「ごめん」と、また謝つた。

「確かに、私はいじめられっ子だよ」アスカは投げ出すように言った。「でも」と言いかけた時、「分かつてるよ」とカオリが語尾をさらつた。はつきりとした声だった。アスカは開きかけた口をゆっくりと閉じた。

「分かつてるよ。アスカの言いたいこと、全部」とカオリは言い直した。

「あんたなんか……人の話し方をろくに知らない、嫌な不良なんかに、私の何がわかるの?」

アスカが言い終わると同時に、カオリは顔を上げ、天井を見た。ゆっくり、大きく息を吸い込んだ。瞬時に吐き出ると、視線をアスカへ戻した。

一瞬、時が止まつたようにも感じた。

カオリが続きを言おうと、口を開きかけたが、そのまま動きが止まつた。小さな光の屑が、視界を下から上へ、駆けてゆくのが見えた。視線を落とす。足元が眩い光を放つていた。立ち上ると、光はカオリの身体を蝕むように、足元から、すぐに膝下にまで上がつていた。勢いは衰えず、一気にカオリの足が、光の屑となつて、宙へ舞つた。奇妙な光景だつた。カオリの体が徐々に消えてゆく。

アスカは目を丸くして、その光景を凝視した。当のカオリは、いたつて冷静だつた。じつと、光に包まれる自らの身体を見つめた。身体は、すでに、腰まで無くなつていた。しかし、感覚はあつた。ちやんと、足で床に立つてゐる。その感覚が不思議で、カオリは透明になつた身体に触れようと、手を伸ばしたが、触ることはできなかつた。

光は胸元まで上つてきた。驚愕のあまり尻込みするアスカの姿を見据える。光は首元ま来的。カオリに慌てる様子は無い。再び口を開くと、「アスカの言いたかつたこと」と穏やかな口調で言つた。「悪いのは、いつたい誰?」

その言葉を最後に、カオリの姿は、部屋から消えた。声も、もう聞こえなくなつてしまつた。ぽつりと、アスカだけが部屋に取り残された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9544z/>

ゴッズ・ミステイク-神様の過ち-

2011年12月29日21時45分発行